

中学生の部 最優秀賞

静かな基調低音

豊島岡女子学園中学校 2年 富澤 雫

作品名『坊っちゃん』

選んだ一行 だから清の墓は小日向の養源寺にある。

「だから清の墓は小日向の養源寺にある。」

『坊っちゃん』をしめくくる最後の文です。

気つぶのいい言葉で疾走してきた物語の終わりに、無造作に置かれたこの一文が、静かな余韻をいつまでも私のなかに残します。

坊っちゃんは嘘が嫌いです。企みも打算も坊っちゃんにはありません。いつでも本音で、本音過ぎて人から理解されにくく、生きづらいことも多そうですが、自分がそんなふうであるということにさえ頓着していません。

私は眩しいものを見るように、その姿を追いかけます。はらはらしながら目が離せません。私だったら、月給が上がるなら大人しくもらっておくほうが得だ”という、下宿屋のお婆さんの忠告にうなずいてしまいますし、“君が来てから生徒の成績が上がった”などと誉められたら、簡単に喜んでしまうからです。中味のないお決まりの教訓に、“あなたの仰る通りにはできません、この辞令は返します”と、たとえ言ってみたくても、きつと、絶対に言えないからです。

坊っちゃんのことであることを、今だったら、空気が読めない、とでも言うのでしょうか。

でも、正直にしていれば、誰が乗じたって怖くはない”のです。嘘がない心の中は気持ちがいだらうなど思います。温度の低い風がいつも吹き透っているような軽やかさ。坊っちゃんの心の中は、そんな感じなのかもしれません。それを、清は知っていたのでしよう。

遠く離れてみて、坊っちゃんは、初めて清のことを思います。町内の人々からは乱暴者の悪太郎とつまはじきにされ、家族にさえ好かれなかった彼に、あなたはそのままがいいのだと言ってくれた人。いつかあなたは立派な人になると、その未来を無条件に信じてくれた人。清の存在は、坊っちゃんにとって、どれほど大きかったことかと思えます。

どこまでも歯切れよく、感傷とはほど遠く展開していくこの物語には、静かな優しい低音がつねに響いています。清の坊っちゃんへの愛情。坊っちゃんの清への思慕。それが、このお話を、ただ痛快なだけのお話にしていません。

そもそも、これは痛快なお話といえるでしょうか。たしかに鉄槌は下しました。ぽんぽん短く語る坊っちゃんの言葉には、笑ったり、うなずいたり、溜飲をさげたりできます。けれど、結局のところ、うらなり君は遠い地へ赴任し、職も住む場所も手放したのは、正義を成したはずの坊っちゃん達の方でした。これは、ほろ苦く、少し寂しい物語でもあるのです。

だからこそ、

「だから清の墓は小日向の養源寺にある」

この文で物語が終わるとき、感じる平穏に驚き、胸を打たれます。